

上の条件から、あくまでもイワシに執着せざるを得なかった。また、漁業のみに依存してきた岩和田では、漁業の持つ不安定性から脱皮するために、観光地化に伴う民宿を積極的に兼営することによって、生活の安定と向上を得る漁民が増えた。一方片貝では、漁業者は網元・漁夫共に専業者でなければ周年操業は行えないので、民宿を兼営する者は、少数の採貝船経営者を除いてはまずいない。

このように対応に違いはあるにしろ、2つの出来事は、それぞれの地区の社会構造を大きく変えた。特に観光地化という現象は、新たな就業機会の提供と都市的諸要素の搬入とにより、“生業”としての漁業から“職業”としての漁業へと、漁民自身の漁業観を変えていく役割を果たしているのではないだろうか。今後、新たな漁業観は、沿岸漁村をどう変えていくのだろうか。

霞ヶ浦周辺出島村の農業

大河内 裕 子

茨城県は全国有数の農業県である。にもかかわらず、その内容は従来後進的であるとの指摘を免れなかった。しかし近年の農業をとりまく環境の変化に伴ない、茨城農業も質的転換が迫られている。常磐線近くに位置し、土浦・石岡に隣接する出島村は、このような動きを敏感にとらえて商品部門を導入・発展させている。

(1)研究の目的

出島村の農業における選択的拡大の現状を把握するとともに、導入された商品部門が台地集落と湖岸集落ではまったく異なることに着目し、そのような違いが生じた理由を考察する。

(2)研究の枠組

まず、出島村の自然・人文環境について概観し、次に産業構造について農業・漁業をとり上げ、現在に至る過程及び現況を把握する。それによって農業地域区分を試みる。そして、先に設定した農業地域より湖岸集落2地区、台地集落1地区を選定して調査・研究し、農業の商品部門が発展する以前の集落の農家経営及び商品部門発展後の農家経営について比較考察する。最後に、以上のことから台地集落、湖岸集落の農家経営の違いについて、

①自然条件②商品部門導入以前③高度成長農家経営の変貌、の3点からまとめた。

(3)研究の結果

①自然条件

- a 湖岸集落…開析の進んだ複雑な地形の狭い台地及び霞ヶ浦縁辺の沖積低地よりなる。
- b 台地集落…平坦で広い台地及び河川流域の狭い沖積低地よりなる。

②農家経営の原型（商品部門導入以前）

- a 湖岸集落…畑地が狭くふつう畑作に不向きな畑が多いので水稲依存。農業収入の不足分は漁業収入で補う。
- b 台地集落…農業に依存するしかなく、農業専業率は極めて高い。狭小な水田を補うために土地生産

性の低い畑を広く経営したが、手作業による農作業ではその面積にも限度があった。

③高度成長以降の農家経営の変貌

a 湖岸集落…農業・漁業の分離発展の傾向。

農業を中心とする場合は、耕地に恵まれている集落では集約的作物栽培（梨・蓮根）、耕地に恵まれていない集落では畜産（豚）を發展させ、湖岸集落の地域分化が顕著となる。漁業を中心とする場合は、獲る漁業から鯉の網いけす養殖へ転換している。

b 台地集落…近隣平地林地帯の開発が進み、交通も改善されたので、生産性の低い畑作農業には力を入れず雇用兼業への道を急速にたどった。農業は粗放経営のまま、従来の作物である甘藷・落花生を栽培する地域と、省力果樹である栗を導入・發展させた地域とに分化した。

高崎市の都市化と機能地域の分化

木村多美子

(1)研究の目的

東京から100Km内陸に位置する高崎市も、昭和40年前後から、急速な都市化が始まった。住宅は、旧市内から、続々と、周辺地区へ移転を始め、旧市内の小・中学校において、児童数が、年々減少する状況になった。このような、周辺地域への急速な人口流出と、それにもなり都市的土地利用の拡大は、どのような要因で成されるものか、そして、都市の成長に伴ない、中心市街地の再開発が機能地域の分化をもたらすか、という二点を明らかにすることを、研究の目的とする。

(2)研究の方法

明治時代以後の、都市的土地利用の拡大とその方向については、5万分の1の地形図を重ね合わせて調べ、その拡大の要因については、主として、高崎市の歴史に関する資料で検討した。また、昭和30年以降の、都市化の進展の著しい時期においては、農地転用の資料をもとに、分析を行なった。工場、卸売商の移転後の跡地利用については、資料をもとに、聞きとりと現地調査を行なった。

(3)研究の結果

高崎市における、都市化の特徴を、戦前と戦後について分けてまとめた。戦前は、主として、鉄道開通による運輸流通機能の充実によって都市の發展がもたらされた。初めは生糸・絹織物の集散地として、卸売機能が、發展し、次に、食品・製糸の工場設置により、生産機能が加わった。それにもなり、都市的土地利用の拡大は、高崎駅と、北高崎駅の二つの鉄道駅周辺に成された。戦後においては、特に、昭和30年代に、過密になった旧市内から、住宅、工場、商店、運輸施設の移転が始まった。その結果、都市的土地利用の拡大は、今までのように、北から東部へかけて、スプロールの拡大だけでなく、飛地状に広がった。住宅団地は、主要道路沿いの市外縁辺部に造成され、またそれらの地区へは建築業者による住宅建設も行われ、宅地化が促された。工業団地は、従来のように、駅周辺に立地し、八幡駅と倉賀野駅に、中心工場地区を形成した。それによって、二つの駅周辺の都市化が促された。また、問屋団地を、高崎市街地と国道17号線をつなぐ地点に造ったことにより、市